

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

## トイレへの家出

小三・宮国 愛

ぼくの名前はともや。ゲームが好きな小学3年生だ。

ある日、ゲームをしていると、

「ともや!! かたづけなさい!!」

と、おこられた。しかしぼくは謝らずに、口ごたえをしてみました。

お母さんは、

「かっつてにしなさい」

と、いって部屋を出ていった。ぼくも、こんな家、家出してやる、と思った。でも……どこに家出すればいいのだろう。そう考えていると、トイレに行きたくなってきた。

ぼくはトイレでも家出のことを考えていた。

よっちゃん家はどうかなあ。でもよっちゃん、今日はピアノとじゆくがあるって言ってたしなあ。こう太君家はどうかなあ。でもこう太君、今日は洋助君と遊ぶって言ってたしなあ。だいいち、友達のお母さんが、ここにいますよ、ってぼくのお母さんに教えちゃうだろうなあ。公園はどうかなあ。でも、雨がふったらどうしよう。そう考えながらふとまわりを見わたした。

「そうだ!! トイレに家出しよう。トイレなら、中からかぎもかけられるし」

そう言っていると家のドアをあける音がした。まどをのぞくとお母さんが買い物に行くのが見えた。よしっ今の内に、じゅんびだ。

心の中でそう言った。ぼくは台所に向かった。そして戸棚からせんべいとりんごとみかんをとった。次にぼくは自分の部屋からまんがとゲームをとって来た。これでじゅんびは万全だ。そう思いながらトイレへ向かった。トイレのカギをしめたしゅんかん、

「ただいま」

と声がした。お母さんが買い物から帰ってきたのだ。

「ともや、さつきはごめんね。お土産買って来たわよ」

ぼくはお土産ときいて出たくなかったけど、ここで家出をやめるまいと思った。

「ともやいるの、いないの」

少しおこった声でいいながら、ぼくの部屋のドアをあけた。

「でかけるなら教えてくれればいいのに」

そういいながらお母さんは部屋をでていった。

しばらくするとテレビをつける音がした。よし、今ならゲームをしてもばれないかもしれない。そう心の声でいいながらゲームの電源をつけた。だれにも注意されないでゲームができるなんてサイコーだ。

「よし。全面クリアしたぞ。そういえばだんだん暗くなってきたな。このまま暗くなったらどうしよう。そういえばあれからのくらい時間がたったんだろう。なんだかのどもかわいてきたな。そういえば今日、見たいテレビがあるんだった。もう始まってるか」

そう不安になっているとき、なんだかいいにおいがしてきた。今日はぼくの大好きなカレーだ。そういえばなんだか心細くなってきた。お母さんにあってあやまろうかな。そう思い、トイレのドアをあけた。

「お母さん、あのね……」

---

お母さんはなんともなかったような顔をして、

「あら。帰ってきてたのね。夕ご飯できてるわよ」

「実はぼく、家出したの。しかもトイレに家出したの」

というと、お母さんはまるで知っていたかのように、にやにやしな  
がら、

「知ってたわよ」

といった。ぼくはおどろいて、

「なんで？」

ときくと、

「げんかんにくつがあったでしょ？ それにリンゴもなくなってた  
し」

「本当にごめんなさい」

そしてぼくはカレーを食べた。そのカレーはとびきりおいしかった。  
た。

---